様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月 14 日現在

機関番号：32705
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21730646
研究課題名（和文）　ホネットの承認論にもとづく人間形成に関する研究

研究課題名（英文）　Research on Human Formation in Honneth's Recognition Theory

研究代表者
藤井　佳世（Fujii Kayo）
鎌倉女子大学・教育学部・講師
研究者番号：50454153

研究成果の概要（和文）：ホネットの承認論は、理論と実践を架橋する人間形成論である。他方で、承認論は、自己実現を可能にしてきた人類の歴史的発展を組み入れた理論である。しかし、現になされている承認に馴染まない身体を救いあげることは困難である。そこで、承認行為が異なる承認を生み出す内包的な破裂を引き出すことができるような、承認の否定にみられる自己形成論的なポテンシャルを救い出すことが、承認と人間形成を論じる際に必要な視点といえる。

研究成果の概要（英文）：Honneth's Recognition Theory is Bildung Theory in connection with Theory and Practice. The recognition theory includes human beings' historical development. However, the theory cannot discuss the body which does not adapt itself to the present recognition. Then, it is important that a recognition act causes the burst which produces another recognition. That is, the self-formative potential contained in denying recognition is a viewpoint required for Recognition and Bildung.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育哲学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：ホネット、承認、ハーバーマス、コミュニケーション、人間形成

１．研究開始当初の背景

（１）ホネットの承認論は、教育学分野において本格的な研究が始まったばかりである。例えば、人間形成論の視点から研究を進めているストヤノフ（Stojanov,K.）は、「教育学におけるホネットの承認論の研究は部分的である」と述べ、ホネットの承認論における内的超越性に焦点をあてた人間形成論を展

開しようとしている。(Krassimir Stojanov, “Kritische Gesellschaftstheorie als Bildungstheorie,” in Ludwig A. Pongratz et al.eds. , Kritik der Paedagogik -Paedagogik als Kritik,Opladen: Leske und Budrich,2004,S.51-66)。また、ストヤノフのような継続的な研究ではないが、テーマに関する研究のなかでホネット承認論をとりあげている研究もある。例えば、正義に関する議論のなかで、バルツァー(Balzer,N.)は、ホネットの承認論を複雑性における固有性の承認としてとらえ、正義論としての提示を試みている。(Nicole Balzer, “Die doppelte Bedeutung der Anerkennung”,in Michael Wimmer et al. eds.,Gerechtigkeit und Bildung, Ferdinand Schoeningh, 2007, S.49-76) このように、教育学においてホネットの承認論そのものが十分に研究され展開されているとは言い難い状況にある。とりわけ、援助や気づかいといった不安定な領域を取り込むホネットの議論は、コミュニケーション的行為にもとづく人間形成のとらえ直しをせまるものであり、ストヤノフとは異なる人間形成論としての課題があった。

（2）コミュニケーション的行為にもとづく人間形成論を探究する中で、補完的にホネットの三つの承認様式が論じられてきたが、ホネットの承認論そのものの考察が十分ではなかった。そのため、承認と了解の関係をさらに探究する必要があった。

（3）人間の軽んじられた経験を含む弱さの側面が織り込まれた承認論は、人間の生き様を追及する実存的試みに傾倒することなく、社会正義などの社会的領域において考察されており、社会的なコミュニケーションにおける教育理論を構築できる可能性がある。

２．研究の目的

（1）ホネットの承認論にもとづく人間形成論を提示する。

①ホネット承認論における承認概念の明確化と承認論の枠組みを明確化する。

②道徳理論としての承認論とハーバーマスの討議倫理学の相違性と共通性を提示する。

③ホネット承認論を人間形成論として提示すると同時に、ホネット承認論の人間形成論としての限界と可能性を示す。

３．研究の方法

（1）常時、「ホネットの承認論」、ハーバーマスの「了解概念」に関する資料を収集する。とりわけ、ホネットが書いた雑誌論文や未入手の著書を中心に収集する。『承認をめぐる闘争』以後、活発な議論活動をホネットが行っていることに注目し、政治哲学分野などの関連分野にも注意をはらう。『Unsichtbarkeit』(2003) に収められている論文「Erkennen und Anerkennungs」、『Befreiung aus derMuendigkeit』に収められている「Einleitung」と「Organisierte Selbstverwirklichung」などを承認と自己実現という視点から解読する。

（2）ホネット承認論と人間形成に関して、他の研究者と専門的な知識提供、意見交換を行う。

（3）討議倫理学としてのハーバーマスのコミュニケーション的行為概念とホネット承認論の比較を通して、「了解」概念と「承認」概念の共通性と相違性を明らかにするために、ハーバーマスのテキストにおいては『コミュニケイション的行為の理論』以後の討議倫理学に関するテキストの解読を進め、承認概念と比較考察する。

４．研究成果

（1）教育学とホネット承認論―二つの視線

承認行為は従属関係を生み続ける権力行為であると主張するリッケンと承認行為は

権力行為ではなく自己を形成する行為であると主張するストヤノフの二人の違いは、教育行為と承認行為の重なりからみた教育学的受容の違いである。

リッケンからみれば、承認行為の重要性を叫べば叫ぶほど、それを教育目標として設定するようになる。そうなれば、承認することは、教育者が自由に使用できるものと考えられ、承認することの意義が第一義にならない。また、承認行為は、そもそも（自己からみれば）他者に依存しており、自己を形成するためには他者を認めるという自己の否定あるいは他者への従属が含まれている。そのため、教育における権力関係を承認行為は助長するだけである。

他方で、ストヤノフは、自律を養成する教育において、承認行為は他者を征服する意味での権力行為とは異なると捉える。ストヤノフからみれば、リッケンの考えは、権力と権威の区分けがなされておらず、それらを混同している。子どもの未来へ向かう変化可能性を重視するストヤノフは、承認を「まだそうなっていないだれかとして承認されること、あるいは、だれかとして『届けられること』である」（ストヤノフ）と捉える。すなわち、承認行為は、自己を形成する一側面であり、未来を含む行為である。

（２）経験的研究との接続を測る道

（１）でとりあげた二つの道以外に、経験的研究との接続を測る道がある。ここでは、ホネットの承認論そのものを研究対象にするというより、教師生活や子どもたちの生という教育領域において承認の機能を明らかにする研究が主に進められている。こうした研究は、ホネット承認論における承認の三形態が、それぞれの領域における経験的研究において、証明されなければならないと捉えており、臨床的視点を含みいれたホネット承認論の教育学的展開の一つといえる。

すなわち、承認は、実践的関係からみれば、多様な内容と目的をもつと考えられる。こうした経験的研究において重要なことは、承認論の体系を論じることでも、承認論の目的を読み取ることでもなく、経験的に内容豊かな人間形成のありようを描きだすことにある。そのため、経験的研究における人間形成は、承認論はその一側面であり、それに限定されるものでない。

（３）人間形成と承認からみたホネット承認論

ヘーゲル研究者でもあるヴィガー氏は、承認と人間形成を考える際、ホネット承認論を出発点としながらも、ヘーゲル研究者のジープによる研究をもとにして、人間形成論として取りあげる際のホネット承認論の不十分さを以下のように指摘する。

ヴィガー氏によれば、ホネットの理論やカテゴリー区別が教育的相互作用や問題構成において、いかなる状況においても可能だというわけではなく、経験的な素材によって新たな区別や別の区別を強いられ、カテゴリーは、拡大され解釈し直されなければならない。また、ホネットの承認理論は綱領的にみえるが、どのような種類の理論にかかわる問題なのか明確ではない。

さらに、ホネットの理論は、「規範的に内容豊かな社会理論」というより、社会理論を参照した倫理学である。この倫理的パースペクティヴにおいて、道徳的原理が問われている。したがって、感情的な親しい関係、法的関係、社会的再生産のメカニズムは、承認形態の理想でもある。しかし、ホネットは、社会的関係とその理想のあいだの異議を分析することはない。

承認の中心的なカテゴリーは、批判的社会理論の普遍的な基礎付けの要求を通して現

れ、あらゆる社会的コンフリクトに共通する解釈を拡張しすぎであり、内容的に空洞化している。さらに、ホネットは、ヘーゲルにおける法的承認の新しい解釈において、あきらかに強調箇所の変更をおこなっている。それは、ホネットが、法を主体の要求や主体の能力として優先的にもたらされ、自己実現の側面にしたがってとらえている点にある。

つまり、ホネット承認論はヘーゲル哲学とは異なる側面を多く有している新しい社会理論である。

（4）ホネットの承認論にもとづく人間形成

①否定された感情と抵抗

ホネット承認論は、三つの異なった承認形態―愛の関係における承認、法の関係における承認、価値共同体における（評価の）承認―を論じたものである。承認が損なわれている場合、「暴力的圧力」、「権利の剥奪」、「尊厳の剥奪」がなされており、肯定的な自己関係を育む機会が奪われる。例えば、身体的虐待や社会的排除がある。こうした軽んじられた経験は、「はずかしさ」や「屈辱」といった感情的な経験として現れる。これらの否定的な感情反応（negative Gefuehlsreaktion）は、原因を正確に言葉にすることのできない状態における社会的反応である。この前科学的な不正の感情（Unrechtsempfindung）が、当該社会において、正しいことが為されなかったという告発につながる。ただし、この否定的な感情反応は、直ちに社会的抵抗やコンフリクトとして現れるわけではない。なぜなら、社会的抵抗やコンフリクトとして発生するためには、問題を提示する言葉やなんらかの集合的な力が必要だからである。

②自己実現と承認

ホネットが提示する承認の三形態は、「自己実現」の条件である。自己実現に必要なこととしてホネットが提示しているのは、普遍的な尊重と善き生を可能にする相互主観的な安全装置という二つの観点である。法の関係における承認と価値共同体における承認が、自己実現のこの二つの観点を含む。例えば、自己実現は、身分に関係のない平等性が承認されることによって可能になり、ある価値共同体において特別な能力が認められることによって、その可能性が拡大する。自己実現の基本的前提にあるのが、自己信頼である。自らの欲求を分節化することのできる身体がなければ、自己実現を進めることはできない。

③承認の規範

バトラーは、承認から排除された者が、既存の承認に回収されることなく、新たな承認への経路をつかむために、傷ついたことから始まる抵抗や闘争を拡大していくことを提案する。それは、抵抗の徴である身体的な傷つきやすさから生まれる世界、「私たちの住む世界と私たち自身の身体的な傷つきやすさとのあいだに歩いて渡れるつながりを作ること」（バトラー）である。バトラーからみれば、否定された感情は、新しい承認の規範へつながる回路であり、異なる承認形態と自己形成を結びつける契機である。しかし、ホネット承認論は、こうした身体の次元から発生する承認をめぐる闘争を捉えていない。「わたし」の発生は、あなたでもなくわたしでもなく承認の規範に見出されるとするバトラーからみれば、自己形成は、承認の規範をめぐる闘争である。

したがって、ホネット承認論は、承認の社会的地平そのものを問う批判的次元が薄いといえる。ホネット承認論にもとづくかぎり、現存する社会における承認の社会的地平を問うことは難しく、現になされている承認に馴染まない身体を救いあげることはできない。

ホネット承認論を自己形成論として捉える場合には、みずからの承認の形態そのものを問い直すような契機を組み込む必要がある。この承認論は、社会的存在としての身体を軸にして、否定された感情と自己実現によって編まれる承認論であると同時に、自己の規定されていない状態が、新たな承認の形態を構築する承認論となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①藤井佳世「教育的承認の多層性―愛の関係と法の関係のあいだ―」『臨床教育人間学４』査読有、2011 年、103-122 頁
〔学会発表〕（計３件）
①藤井佳世、「ホネット承認論と自己形成」教育思想史学会、2011 年９月、日本大学
②藤井佳世、「ホネット承認論における否定の感情について」教育哲学会、2009 年 10 月、名古屋大学
③藤井佳世、「＜あいだ＞の思想に関する考察－承認の空間の試み－」臨床教育人間学会、2009 年９月、横浜国立大学
〔図書〕（計１件）
①柏木恭典、上野正道、藤井佳世、村山択著、『学校という対話空間』北大路書房、2011 年、1-292 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
藤井佳世（FUJII KAYO）
鎌倉女子大学教育学部・講師
研究者番号：50454153